

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究 (7)

——1960年代（その1）——

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1, 第2, 第3, 第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代, 1920年代, 1930年代, 1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なした。本稿はそのつづきであり、1960年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究のうちの一部、E. ホイッターカー, W. フェルナー, O. H. テイラーの所論を整理しようとするものである。

(1) E. ホイッターカー (1960)

まず、ホイッターカーによれば、スミスは水とダイヤモンドの価値のパラドックスに言及することをつうじて、「ある特定の対象物の効用を表わす」ものとしての「使用価値」と、「その対象物を所有することから生じる他の財貨にたいする購買力を表わす」ものとしての「交換価値」とを、区別し、そしてそのうちの「交換価値」の考察へと進んだ、とされるのであるが、¹⁾ホイッターカーは、価値尺度についてのスミスの議論をつぎのような

ものとしてとらえている。

①スミスは「諸商品の^{リアル・プライス}真実価格と名目価格」とのあいだの、あるいは、「それらの商品の労働での価格とそれらの商品の貨幣での価格」とのあいだの区別づけに注意を払ったのであるが(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited……by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library <New York: Random House, 1937>——以下 W. N. と略記する——, Bk. 1, chap. 5. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年, <I>——以下, 大河内訳<I>と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——, 第1篇第5章。), 彼は, 「人が富んだり貧しかったりするの, は, 人間生活の必需品, 便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる」のであるけれども労働が専門化されるようになってしまったあとでは「一人の人間が自分の労働で充足できるのは, このうちのごく小さな部分にすぎない」と, 述べた(W. N., p. 30. 大河内訳<I>, 52ページ。²⁾)

②だがスミスは, 労働が「すべての商品の交換価値の真の尺度である」, 「あらゆる物の真実価格, すなわちどんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは, それを獲得するための労苦と骨折りである」, と述べ(W. N., p. 30. 大河内訳<I>, 52ページ。), さらにすすんで, 「あらゆる物がそれを獲得した人にとって, またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって, 真にどれほどの値うちがあるかといえ, それによって彼自身がはぶくことのできる労苦と骨折りであり, 換言すれば, それによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」と, 述べた(W. N., p. 30. 大河内訳<I>, 52—53ページ。³⁾)

③しかしながら, 異質労働の問題のゆえに,⁴⁾ スミスは, 「たとえ労働はすべての商品の交換価値の真の尺度であっても, それらの商品の価値がふつうははかれるのは, 労働によってではない」ということを, 認めた(W. N., p.

31. 大河内訳< I >, 55ページ。)。彼は、異なった質の労働の間のつり合った関係といったことを確定するにはある問題が存在するということを、知っていたのであり、そして彼は、労働の質の相違ということに起因するこれらの差異は「ある正確な尺度によってではなく」「日常生活の業務を処理してゆくには」十分な「市場のかけひきや交渉によって」調整される、と述べたのであった (W. N., p. 31. 大河内訳< I >, 55ページ。)⁵⁾

④またスミスは他方で、貨幣の価値の不安定性ということに注目し、そして、穀物で支払われる地代は経時的に、貨幣で支払われる地代よりも安定的であるということを指摘した。しかしながらそれでも彼は、労働が「唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度である、いいかえると労働は、いついかなるところでも、さまざまな商品の価値を比較することのできる唯一の標準^{スタンダード}である」ということを断言したのであった (W. N., p. 36. 大河内訳< I >, 63ページ。)⁷⁾

⑤スミスは、明らかに、その時々においてだけでなく経時的にも交換価値の基準として役立つようなある共通の価値尺度を見つけ出すことを、望んでいたようである。スミスは、実際には労働は一般に行われている交換においては価値を測定しはしないということを、認めていた、しかし彼は、なんらかの意味で労働は貨幣よりも本源的な価値尺度であると考えていたのである。⁸⁾

1) Edmund Whittaker, *Schools and Streams of Economic Thought* (Chicago: Rand McNally & Co.; London: John Murray, 1960) —以下 Whittaker [1960] と略記する—, p. 104.

2) Whittaker [1960], p. 106.

3) Whittaker [1960], p. 106.

4) ホイッターカーは、つぎのような例を用いてこのことを説明している。それによれば、たとえば、ある医者がある自身のためにテーブルを作るのに費やしたであろう労働は、ある熟練した家具製作者が同じテーブルを製造するのに費やしたであろう労働とは非常に異なるのであり、そして実際には、その家具製作者はおそらく、医者がテーブルを作るのに費やした労働よりも少ない労働でもっと良いテーブルを生産したことであろう。そしてまた、テーブルの価値を労働ではかれば、その同じテー

ブルは二つの異なる価値をもつこととなる。Whittaker[1960], pp. 106-107.

- 5) ホイッターカーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「1時間の辛い作業のほうが、2時間のやさしい仕事にくらべて、いっそう多くの労働がいるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむほうが、通常のわかりきった業務で1ヶ月働くよりもいっそう多くの労働がいるかもしれない。」(W. N., p. 31. 大河内訳<I>, 55ページ。) Whittaker[1960], p. 107.

- 6) Whittaker[1960], pp. 106-107.

- 7) Whittaker[1960], p. 107.

- 8) Whittaker[1960], p. 107. なお、ホイッターカーはこの点に関してつぎのような指摘をくわえている。すなわち、確かに、歴史は、貨幣が経時的には非常に当てにならない価値標準であったということを、示している。しかしながら、「すべての商品の交換価値の真の尺度」といったような言葉の使用は、いったい「真の尺度」とは何かのかという問題を提起する。すなわち、我々がこんにち「実質賃金」あるいは「実質所得」について語る時、我々が意味するものは、その賃金あるいはその所得が購買するであろうところの財貨の量である。これは「財貨標準」とよばれてもよいかもしれない。ところが、労働標準は、歴史的には、財貨標準とは非常に異なる諸帰結を与えてきた。というのは、生産効率の向上とともに、労働は、ヨリ多くの財貨を支配するようになってきたからである。財貨標準によれば、我々は、労働がヨリ高価になってきた(すなわち、労働はヨリ多くの財貨を購買するようになった)、と言っているのであり、労働標準によれば、財貨がヨリ安価になってきたということになるのである。「リアル」なものについてのどちらの定義がヨリ良い定義なのかということを、我々はいかにして決定すべきなのであろうか。Whittaker[1960], p. 107.

なお、ホイッターカーのこの指摘からすれば、彼は、スミスの議論では商品の真の交換価値はその商品がどれだけの労働を購買できるかということによって測定されるという意味で労働が真の尺度とされている、とみているともいえようが、ホイッターカーの所論においては、スミスの言う真の尺度としての労働とは商品の生産に必要とされる労働量ではなくてその商品によって支配される労働量なのだったといった明示的な言及はない。ホイッターカーの意図は、ただ、スミスは真の尺度を労働に求めているということを指摘することにあつたようである。

(2) W. フェルナー (1960)

つぎに、フェルナーは、スミスは「土地の占有と資本の蓄積にさきだつ初期未開の社会状態」のもとでは労働(さまざまな財貨のなかに体化され

ている労働量)が交換価値の規制者であったが彼がその中で生活していたような種類の経済に対しては、労働がある意味で本源的なものであるということ⁹⁾を述べながらも、労働は交換価値の唯一の規制者ではなくなったとして土地、労働および資本の用役という三つの生産要素による接近法を示唆した、とみるのであるが、価値尺度についてのスミスの議論に関してフェルナーは、つぎのような指摘をなしている。

すなわち、スミスは、商品の価格比率が労働含有量のみによって決定されない(「規制」されない)現代の状況においてさえも、ある財貨が市場において購買しうる労働の量は、それが交換されうる金やその他のなんらかの財貨の数量よりも、その価値のヨリ本源的な尺度であるということを示唆している。かくして下着の3倍の交換価値をもつ傾向のある1足の靴は、一般に下着に体化されているものの3倍の労働を体化しているのではないが(それは下着に体化されているものの3倍より以上、あるいは以下の資本を体化しており、したがって3倍の労働を体化してはいないであろう)、スミスによれば、その靴が3倍の労働を買う時には、それが3倍の量の金あるいはその他の財貨を買うという時よりも、下着の価値に比しての靴の価値について、我々はヨリ基本的な事実を述べることになるというのである。また我々が靴や下着の価値を歴史的にあるいは国際的に跡づける時、我々は、異なった時点と場所においてこれらの商品が買いうる労働の量を指示することによって、なんらかの第三の財貨によってその価値を表わすよりも、ヨリ有意義な比較に到達する。これは不変の価値尺度としての人間努力の1単位(1時間の仕事)がもつ直観的意義を訴えようとするものである。スミスは、土地の占有と資本の蓄積が始まって以来労働は唯一の価値の規制者ではなくなったとはいえ、それはもっとも本源的な価値の尺度であると考えていたのであり、彼は、ある商品が購買しうる労苦ないし努力がその商品の価値をある絶対的な意味で「測定する」と考えていた¹⁰⁾のである。

9) William Fellner, *Emergence and Content of Modern Economic Analysis*(New

York: McGraw-Hill Book Co., 1960) ——以下 Fellner[1960] と略記する——, pp. 102-103. 松代和郎訳『近代経済分析——その発生過程と内容——』(創文社, 1965年) 131—132ページ。

10) Fellner[1960], pp. 103-104. 邦訳, 132—134ページ。

(3) O. H. テイラー (1960)

他方、テイラーによれば、スミスは、財貨の「価値」の根拠をなしそしてその「価値」を決定するものという問題にアプローチするにさいし、まず、後代の経済学者が「効用」とよんだものとしての財貨の「使用価値」と市場での交換における当該財貨の他財貨にたいする「支配力」としての「交換価値」とを区別することから始め、そして、「限界」概念をもっていなかったためにいわゆる「価値のパラドックス」を解決できずに、その「価値のパラドックス」をつうじて、誤って、使用価値を交換価値の基礎でないとしてしりぞけるのであるが、スミスは、交換価値の基礎の探求をさらにすすめるのにさきだって、まず、交換価値の真の尺度という別の問題をとりあげている、とされるのであるが、¹¹⁾そのようなものとしてのスミスの価値尺度についての議論に関してテイラーはつぎのような見方を示している。

①この脈絡においてスミスは、ひとつの「労働説」を提示する。しかしながら、その「労働説」とは、交換価値を決定するものは何かということについての「労働説」ではなく、それと区別されるべきひとつの別の考えである。ここで問題となるのは、体化された労働という価値の決定因ではなく、支配される労働という価値の尺度なのであり、スミスはここでは、事物が「支配する」人間労働の量が、その事物の交換価値の理想的で、安定的で、あるいは信頼のできる尺度である、あるいは、そのような尺度を提供する、¹²⁾ということを主張したのである。

②そしてスミスは、「支配される」労働時間の不変な価値というこの考えを支持するために、労働を遂行するにあたってある労働者がこうむるある所与の量の「労苦と骨折り」はその労働者自身の心あるいは意識におい

である不変な、あるいは一定の、主観的な価値を持つといった非常に疑わしい議論を、提示する。¹³⁾

③しかしながら最終的にはスミスは、ある一定数の一様もしくは等しい客観的な単位へと分けることのできる等質的な労働といった基本となるべきものが存在しないということから、彼の支配労働価値尺度を、理論的には理想的なものではあるが実際には用いることのできないものとして、放棄する。¹⁴⁾

④さらにまたスミスは、貨幣よりも変動することの少ないあるいは伸縮性の少ない測定物差しの追求をなおも続け、労働の代わりに、ヨリ実際の、次善の測定物差し、労働者の主食である「穀物」へと、向かうのであり、彼は、穀物はすべての商品のうちにあつて（一般に、他の財貨にたいし）それ自身の交換価値の例外的に高度な相対的な安定性を有するということを主張し、また、経済史および経済統計へとわき道にそれることによってこのことを説明しようとするのである。¹⁵⁾

⑤しかしながら結局のところ、以上の議論のうちに、スミスは実際に、交換価値および価格についての彼の一般的な理論において、一般に、彼の支配労働価値尺度以上に彼の穀物尺度を使用しているわけではない。彼は、長期的には当該財貨を生産するための貨幣費用によって決定されるものとしての、競争的に生産される財貨の貨幣価格についての理論もしくは説明にすぎないもので終わっているのである。¹⁶⁾

11) Overton H. Taylor, *A History of Economic Thought: Social Ideals and Economic Theories from Quesnay to Keynes* (New York: McGraw-Hill Book Co., 1960) ——以下 Taylor[1960] と略記する——, pp. 102-104.

12) Taylor[1960], pp. 104-105. テイラーは、スミスがそのような主張をなした事情をつぎのようなものとして示している。それによれば、スミスは、ある事物が市場で支配するであろう貨幣の量すなわち貨幣でのその事物の市場価格は、たんに、その事物の「名目価格」にすぎないのであり、その事物の「^{リアル・プライス}真実価格」ではない、と述べる。ここで彼の意味していることは、貨幣それ自体は、異場所間および異時点間で、それ自体の価値においてあるいはその単位当り購買力において気まぐれに変化す

るため、貨幣は、貨幣以外の諸事物の価値を測定するためのひとつの確固としたあるいは信頼のできる測定物差ではない、ということである。彼は、それ自体がある一定のあるいは不変の価値をもつなんらかの事物を捜し求めた、そうすれば、他の諸事物と交換されるであろうところのこの事物の単位数が、それら他の諸事物の価値を真に測定あるいは表現するであろう。そして彼は、事物が「支配する」であろうところの、あるいは、事物がそれと交換されるであろうところの人間労働の量が、その事物の交換価値のこの理想的で、安定的で、あるいは信頼のできる尺度である、あるいは、そのような尺度を提供するということを、主張した。財貨がその所有者に対して真に意味するものは（彼にとってのその使用価値は別として）、その財貨が彼をして購買または支配することを可能にするところの他の人々の労働の量なのである。これが、しばしば錯覚を起こさせるあるいは錯覚を引き起こす貨幣での「名目価格」とは対照的に、その財貨の「真実価格」なのである。Taylor [1960], pp. 104-105.

13) Taylor[1960], p. 105.

14) Taylor[1960], p. 105.

15) Taylor[1960], p. 105. なお、テイラーは、穀物価値のこの長期的な平均的安定性についてのスミスの説明に関してつぎのような二点を指摘している。それによれば、①スミスはつぎのような説明をなしている。すなわち、食糧（穀物）が一時的に豊富で安価であるときにはいつも、人口の大部分を占める労働者階級は順境にあり、そしてより高い出生率とより低い死亡率を展開する。人口がふだんよりも速く増加するため、穀物需要は急速に増加し、そしてまもなく、あるより高い価格で供給につりあうこととなり、そしてこのことが、穀物価格をその長期的な平均水準のもとへと引き上げる。また逆に、穀物が不足して高価であるときにはいつも、人口増加はおそめられ、そして、穀物需要は、通常的に増大している供給とくらべて相対的にゆるみ、価格をしてその平均水準へと低下させることとなる。このような、穀物価値の長期的な平均的安定性を説明するスミスの理論は、食糧供給と人口増加についての後のマルサス理論のひとつの非常に興味のある先取りである。②つぎのことまた、興味があり、また、特徴的でもある。すなわち、スミスは、この一片の理論を提示しているだけでなく、主に、以前の長い期間にわたっての借地の穀物地代の相対的安定性ということについての、経験的すなわち歴史的・統計的証拠でもってその理論を支援しているのであり、彼は、借地の穀物地代は借地の貨幣地代よりもはるかに少ししか変動も上昇もしてこなかったということを、示しているのである。Taylor[1960], p. 105.

16) Taylor[1960], pp. 105-106.

結 び に 代 え て

以上、E.ホイッターカー、W.フェルナー、O.H.テイラーの「アダム・スミスの価値尺度論」に關係する所論をみてきた。

以下では、それらの所論の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず、ホイッターカーによれば、スミスはその時々においてだけでなく経時的にも交換価値の基準として役立つような価値尺度を見つけ出そうとし、そしてその価値尺度を労働に求めた、スミスは、実際には労働は一般に行われている交換においては価値を測定しはしないということを認めていたけれども、なんらかの意味で労働は貨幣よりも本源的な価値尺度であると考えていたのだ、とされるのであった。そしてまた、ホイッターカーは、当該事物の購買しうる財貨の量で測定するのと、労働で測定するのと、いずれがその事物の「^{リアル}真の」価値をヨリ良く表わすと考えべきなのか、あるいは、「リアルな」ものとは、財貨の量であると考えべきかそれとも労働の量であると考えべきなのか、という問題を提起するのであった。ただし、ホイッターカーは、スミスの言う価値尺度としての労働の量を支配しうる労働の量と考えるべきなのかあるいは生産に必要な労働の量と考えるべきなのか、それともそのいずれでもあると考えるべきなのかということに関しては、明示的な言及をしてはいないのであった。

これにたいし、フェルナーによれば、スミスは、土地の占有と資本の蓄積が始まって以来財貨のなかに体化されている労働量という意味での労働が財貨の交換価値の唯一の規制者ではなくなったけれども、それでも、財貨が市場において購買しうる労働量という意味での労働、しかも、財貨が購買しうる労苦ないし努力という意味での労働がもっとも本源的な価値尺度であって、それによって、その財貨の価値がある絶対的な意味で測定されると考えていたのであり、その尺度によって、他財貨に比してのある財貨の価値についてヨリ基本的な事実を述べることができるとともに、異時

点間および異場所間での財貨の価値についてのヨリ有意義な比較に到達できると考えていた、とされるのであった。

最後に、テイラーは、交換価値の基礎、決定の問題と交換価値の尺度という問題とは別個の問題であるという認識にたつてスミスの交換価値の尺度についての議論を検討するのであるが、それによれば、理論的に理想的な尺度としてスミスは支配労働価値尺度を主張し、その主張を支持するために労働を遂行するにあたって労働者がこうむる「労苦と骨折り」はその労働者自身の意識においてある不変な主観的な価値をもつといった疑わしい議論を提示するのであるが、異質労働の問題のゆえに彼は支配労働価値尺度を実際には使用できないものとして放棄し、そして、それに代わるヨリ実際の次善の尺度として、穀物尺度を主張した、とされるのであった。